井内先生のこと

葉　倩瑋

助手を務めてまもなく一年になろうとしている。私にとっては一年目の今年，井内先生は最後の一年をお迎えになった。お茶大には学生として在籍していた時間の方がはるかに長く，したがって，先生には，相変わらず「学生」の立場で，あらゆる場面で大目に見ていただき，そしてさまざまなことを学ばせていただいた。

思えば，入学して最初に受けた地理学の専門科目は，井内先生の「地理学概説」であった。先生の口から語られた地理学は，入学して新しい生活を始め，そして生まれて初めて「講義」を聴く緊張に，コチコチになっていた私たちの気持ちを解きほぐし，ごく自然に学問の入口へ導いてくれるものであった気がする。自然と人間とのかかわりを論じていかれるなかで，その視点は，手の届かぬような所ではなく，私たちのすぐ身近に存在していることを教えてくださった。講義のなかでは，かたい講義ばかりではなく，大学生活を送るにあたっての励ましや，時には“心得”といったお話もさりげなく織り込まれ，入学当初，ほとんど「地理学概説」を通してしか，地理学科への帰属を確認できなかったなかで，ほっと心安らぐ時間であったことを思い出す。いつも窓の外へ視線を投げながらお話になっていたお姿とともに，鮮やかな記憶である。

私にとって，井内先生との最大の接点は，「大阪」ではないかと（一方的に）思っている。大阪は私の出身地であるが，上京してまもなく，望郷の念が募るばかりのころに，意外にも大阪が井内先生にも縁のある地であったことを知り，非常に心強く感じたものである。陸軍幼年学校時代といえば，おそらく思春期のころ，先生は，大阪の南の方の片田舎で何年かを過ごされたとのことである。時々，「葉さん，観心寺って知ってますか？」とお聞きになることもあり，先生の口からはなはだローカルな地名をお聞きするたびに，当時はもとより，いまでもうれしくなる。金剛山や信太山などは，私にも馴染み深い場所であるが，先生も学校生活のなかで，度々訪れたことがおありだとかで，時折話題にされる。重い鉄砲をかかえての行脚は，「ほんとうに重かった」と話されていたが，そのロぶりには実感がこもっていた。信太山といえば，先生のお話のなかで，いつ思い出してもふっと微笑んでしまうエピソードをうかがった。信太山での実戦（？）訓練に励んでおられたとき，重い鉄砲をかかえて，草叢にひそんでいたところ，“不覚にも”眠りにおちてしまい，ふと目が覚めるとあたりは真っ暗でだれも居なくてびっくりしたことがある，というものである。現在のりんとしたお姿からは，ちょっと想像できないエピソードなのだが，先生のことが身近に感じられた次第である。信太山あたりの，当時の豊かな自然環境については繰り返し語られ，開発に伴い，団地に様変わりした現在の様子しか知らない私は，実に興味深くお話をうかがった。かの地の何処かが先生の機微に触れ，あるいはそれが先生の地理学を志された原点となったのであろうかと，勝手に想像を膨らませている。

この一年は，さまざまなお話をうかがう機会があって，ほんとうに幸いであった。さりげないお話から，学生時代には知り得なかった先生のお人柄やお考えに接し，多くを教えられた。

今後ともいろいろ御指導いただければと存じ上げる次第である。なにとぞお元気で，益々御活躍をお続けくださることを，お祈り申し上げております。

（34回生）